

研究雑話 (27)

フランスの障害教育・福祉事情(十一)・子どものテンポにあった学校生活、修学リズムの改善

藤井力夫

前回はフランスにおける落第生をめぐる問題についてお話ししました。小学校一年生で六人に一人が落第。が、子どもの実態は日本でも同じ。フランスでは七〇年代はじめころから二三、四人学級が実現。加えて、小学一年の早期から落ちこぼれを許さない取り組みを実施。落第そのものは減らす方向で、つまづきの克服のための支援教育を充実。心理学、心理運動学、心理教育学を勉強した先生たちによる個々の子どもに必要な援助の実現。落第しても子どもたちは以外と平気。むしろわかる指導で自信を回復。できないことができるようになる。子どもたちにはたいへんな喜び。当時で三枝に付き一チーム配置。現在さらにこの方向を充実。修士課程に該当する現職教育により資格を獲得。ですから財政的には大変な負担。

ポで学習できなければ、理解できないのみならず、疲労のみ蓄積する。子どもの発達と生理にあった学校。これをどうつくるか。「子どものテンポ(生活)にあった学校」「リズムスコール(修学リズム)」といった用語が好んで使われました。ドクロリの生活教育(一九〇七年)。これに遡って新たに教育の中身が検討されたのでした。

かりしている時間。小学生の注意持続時間は平均二十分前後。2「めざまし活動」とはまわりの自然や社会の学習、たんなる「合科」ではない。子どもにも興味と関心にどれだけ訴えられるか。教師の力量が問われる。3体育、音楽、図工は身体活動の一部で、教科学習の基礎であり媒介。担任だけでなく、専門教師や校外施設の指導員の指導を受けられるように工夫すること。4朝、深呼吸や軽い体操をしてから授業を開始。休み時間には十分に気分転換させ、時に昼寝やおやつをとれるようにすること。

表Aは、二四回、学級編成の原理のところでお話したボーベ養護学校、クラスAの時間割です。午前、午後、たいへんゆったりした活動、「生活による生活のための学校」、そういいたいでしょう。

表Bに養護学校における修学リズム編成の考え方をまとめました。時間割があるようでない養護学校の生活。それだけに何をどう教えるか、小学校の修学リズム改善のまさに先進的な具体例でもあるわけです。子どものテンポに合わせてどのよう改善するか。以下、小学校低学年における修学リズム編成の原理を紹介しましょう。

1教科は国語、算数、「めざまし活動」、身体表現の四つ。読み、書き、算数は午前中の覚醒のしつ

表A. 週時程: クラスA (I.M.P. de BEAUVAIS, 1985-86)

Table with 5 columns (日, 火, 水, 木, 金) and 8 rows (8:30, 10:00, 10:30, 12:00, 13:30, 16:00, 16:30). Activities include physical education, reading, and group work.

表B. 修学リズム編成の実際

- 1. 二人の教師による「同時間・2空間・別指導」。台所兼居間を挟んで小さめの教室が2つ。女教師(初等教育教諭資格)が主として読み方、書き方等の勉強。男教師(特殊教育教師資格)が「めざまし活動」を担当。
2. 午後は戸外での活動が基本。スポーツや調理、レクリエーション。男の教師が自転車の選手で自転車乗りが多い。
3. 水曜と土曜が休み。水曜の午前中は地域の小学校、特殊教育中等部などとの統合教育。
4. 動作にスムーズさの欠ける子どもたちを対象とする心理運動教育、構音等発音に問題のある子どもを対象とする言語指導。
5. 休憩時間には「おやつ」をとり、疲れの出でくる11時半になれば教室を片付け、みんなで先生に物語を連続で読み聞かせてもらう。

(北海道教育大学教授)

落ちこぼれを出さないためのより根本的な教育改革。それは子どものテンポに合わせて学校を改善しようとするものでした。子どもが自分のテン